

鑑真を書くにあたって

永守雄治（蒼穹）

Yuji (Soukyuu) Nagamori

今から一二五〇年前、西暦七五三年、この何とも語呂の良い年に鑑真は来日しました。仏法の正しい教えを日本へ伝えて欲しいとの要請に応えての事でした。事の次第を少し紹介しましょう。

これより遡ること十一年前の七四二年、楊州の大明寺に鑑真を訪ねる二人の日本人僧がいました。栄叡（うぶえい）と普照（うべしやう）です。二人はしかるべき僧を日本に招聘する役目を帯びていました。鑑真は二人の話を聞き終えると、誰か日本へ行く者はいないかと呼びかけます。沈黙の中、弟子の祥彦が日本は遠い、それに自分達は修行中だとして渡航を否定する意見を述べます。これに対し鑑真は、仏法に関わることに皆が行かないのなら私が行こうと宣言します。

この時鑑真は五十五歳、今とは異なり当時としてはかなりの高齢、仏教布教のためとは言え渡海の決断には頭が下がります。そしてそれは艱苦をともなう厳しい旅の始まりでもありませんでした。

その時代、唐では国外に出ることを禁じていましたので法の目を

かいくぐつての出国となります。また弟子を含め反対派もいて妨害する者もあり、一次から五次までの出帆計画は悉く失敗、殊に五度目は遭難の末、海南島まで漂流しました。

それでも鑑真の決意は変わらず、来日を計画して十一年目の七五三年、六度目の出航で鹿児島秋妻屋（あきめや）の浦（現坊津町）に漂着、大願成就します。しかし、長い年月と壮絶な旅の疲れでその眼は光を失っていたと言います。正に驚嘆すべき精神力、実践力で、胸の熱くなるものを感じます。

さて、三十数年前のこと、中国最高指導者鄧小平さん来日の際、唐招提寺を訪れて鑑真像に手を合わせ一度中国へ里帰りさせたいとの話は記憶に新しく、そう時を置かず実現しました。その折の中国側の歓迎ぶりを同行した関係者は、像が傷まぬように道路が舗装してあり驚いたと伝えました。正にこうしたことが日中友好の絆を深めるもので、今日の両国の関係を見るにつけ互いを思いやること

が重要、今更ながら鑑真の存在の大きさを感じます。

今回このことをテーマに書作することは、来日一二五〇年という節目の年を生きる者として大きな喜びであり、少なからず意義を感じるのであります。(以下作品について)

〈素材〉「鑑真」

日本僧の仏法を求める篤い心に鑑真は渡海を決意する 艱苦の旅の始まりであった 西暦七五三年鑑真大和上来日に想う

〈構成〉大字と小字群のコラボ。

〈意図〉「鑑真」は文字そのものの表情が大字に相応しく見映えのするものと考え、「鑑」は渴筆を交えて粘りのある線で、「真」は少し抑えて二字が同じ重さにならぬように配慮し紙面上部に位置づけて力強く、インパクトを求めた。また下部には来日の経緯を小書きで添えることで、漢字かな交じり書ならではの親しみやすさを損なわないよう心掛け、大字の「鑑真」とのバランスを考え健康的で立体感を伴う現代美術としての視覚性を意識した。

〈墨〉 唐墨と墨液を合わせたもの

〈用筆〉 和筆、兼毫大小二本

〈紙〉 本画箋

〈サイズ〉 縦85cm×横114cm

※参考・東野治之「鑑真」



85 × 114

鑑真

日本僧の仏法を求め篤い心に鑑真は渡海を決意する
艱苦の旅の始まりであった

西暦七五三年鑑真大和上来日に想う